

モハメド・アリという現象

The Phenomenon Called Muhammad Ali

ストリート的所作、イスラームの魂、黒い身体

Street Gesture, Islamic Soul, Black Body

中村寛
NAKAMURA Yutaka

ウィリー・グリーンとかいう奴が
世界史上、最悪のクソツタレだとかほざいてる連中もいやがんな。
けどな、タバコに火つけてよ、糞ひねりだして、カツラしっかり締め
あげて聞けよ、
ドロマイトっちゅう名のワルのクソツタレについてしゃべっからよ。
ドロマイトはよ、サン・アントンの出身で、
生まれたその日からぶらついてるとんでもねえ野郎だった。
だってな、かあちゃんのケツから生まれ落ちたその日によ、
奴はとうちゃんの顔をひっぱたいて
そんで言ったんだ、「おいデス野郎、いまからこの場所はオレのもの
だ」ってな。
一歳のとき奴は、ウイスキーやらジンやらを飲んでた、
二歳のときには、酒の入ってたボトルを食っちまった。
それからドロマイトには、サドン・デスっちゅう名のおじがいてよ、
そいつは息のにおいだけで、何十ものワルを殺しやがったんだ。
(後略)

—— “Dolomite” in *Get Your Ass in the Water and Swim Like Me*
[Jackson 2004(1974): 57-58]

1. はじめに

描きたいのは、モハメド・アリ（1942-2016）の生きた時代の空気であり、アリの身体とそこから発せられる言葉とにまわりつく諸力の匂いである。

なぜモハメド・アリなのか。昨年末に立教大学で研究会が開かれ、そのあとにこの文章を書いているのだから、いまさら「なぜ」もへったくれない

もんだ——そんなツッコミをいれたくなる。しかし改めて、なぜモハメド・アリなのかという問いかけから始めたい。

闘うアリ、強いアリ、無敵のアリ、奇跡の復活、巧みな話術、大胆な挑発、ブラック・ナショナリズム、ブラック・プライド、ネイション・オブ・イスラーム、スピリチュアリティの模索、パーキンソン病……。いくつものアリのイメージがつくられ、消費されつづけている。自伝や評伝が書かれ、ドキュメンタリーがつくられ、研究論文もある。

モハメド・アリはもちろんすでに有名な存在なのだが、彼の有名性がつくられるためにはいくつかの条件が必要に思える。表現され、展示され、時として陳列された彼の言動に人が励まされたり傷ついたりするのは、彼が人々のイメージと結びつき、共犯関係にあったことを意味する。ボクシングという競技を通じて、メディア上での派手な言動を通じて、アリはなにをしたのかという問いは、人々がそこになにを読み込んだのかという問いと切り離せないものになっている。

それはちょうど、クロード・レヴィ＝ストロースが「呪術師とその呪術」のなかで描いて解釈してみせた、呪術師とそれを取り巻く共同体の成員（呪術の信仰者たち）との関係に類似している [レヴィ＝ストロース 1972]。レヴィ＝ストロースのこの論文では、呪術の効力は呪術師の言動や能力のうちに求められるべきではなく、不安や不満、恐れの対象化（分節化＝明瞭化 articulation）とその「解決」を求める公衆の合意の側にあるとされた。もちろん、この解釈に反論がないわけではない [Siegel 2006]。しかし、ここではレヴィ＝ストロースにならってこのように言ってみようと思う。モハメド・アリに関する毀誉褒貶は、アリの言動のうちに求められるのではなく、それに肯定的にも否定的にも反応した公衆の欲望や情動のうちに求められる、と。そして、レヴィ＝ストロースの論じる呪術師が、呪術の技術の演劇的な提示によって公衆と共犯関係を結ぶのと同様に、アリはテレビなどを通じての身体的技能（ボクシングと挑発的言動）の演出を媒介にして公衆と共犯関係を結ぶ。

アリが賛同者や敵対者とのあいだで有名になっていくためには、まずもってテレビの普及が不可欠だったのではないかと思えるほど、彼の発する言葉

は身体的で、躍動感ある身ぶりに満たされている。あるいはこう言ってみたくなる。彼の言葉は肉体で満たされている、と。これはメタファーでもなんでもない。グレゴリー・ベイトソンが主張するように、トーンをとまわらない、いわゆる肉体なき言葉はじつは存在しないとも言えるが、彼の言葉は強い律動やイントネーションをとまなびながら発せられる [ベイトソン 2000: 45-51]。そこには肉体の苛烈なうごきがあり、ふるえがあり、おののきや挑発やからかいがある。

僕らが人の言葉に癒され傷つくのは、その言語体系を信仰し、それらの言葉（やそのトーンや仕草）が身体の一部を構成するようになるからに他ならないけれど、アリは、この仕組みを批評的に理解したうえで、それを音楽のように用いて演出し、人を惹きつけ、誘惑し、愛し、溺れさせ、痛めつけたように思えるのだ。そのことの後悔も含めて、アリの生は身体を懸けた《仕事》だったと言えるかもしれない。

とはいえ、アリの言動が見かけ上の派手さとは裏腹に、政治的にそれほど過激でラディカルだったかという点で、いくつかの点でそれには留保をつけざるを得ない。アリに関する評伝を書いたマイク・マークシーによれば、「アリは、指導だとか、政治社会活動だとか、イデオロギーだとかに対する嫌悪感によって強く駆り立てられていた」のであって、むしろ一定の役割や表象を担わされることからつねに身をかかわしつづけていた [マークシー 2001]。

人々を戸惑わせたネーション・オブ・イスラームへの入信は 1964 年のことで、その時点でネーションはマルコム・X の活躍やメンバーの活動、そして『憎悪が生む憎悪 The Hate That Hate Produced』（マイク・ウォレス&リス・ローマックス制作、1959 年）のようなドキュメンタリー作品などによってすでに全国的に知られた教団になっていたし、異論や反論が多くあったとはいえ、ストリートでタフに生き延びようとする者たちを中心に一定の注目や支持を集めるようになっていた。

また、人種問題に関する言及も、当時のスポーツ界でその種の政治的メッセージの表明はほとんど皆無に等しかったとはいえ、アメリカ社会全体で見れば、1950 年代後半から 1960 年代初頭には完全なる自由を求めての「抵抗」が明瞭に表現されつつあった。たとえば、アーカンソー州知事のオーヴァル・

フォーバスがリトル・ロック・セントラル高校の人種統合を阻むために州兵を送り込んだ事件を受けて、1960年にはチャールズ・ミンガスが「フォーバス知事の寓話 Fables of Faubus」という曲を書いてその関係者を痛烈に批判しているし、同年にはアビー・リンカーンの抗議の叫び声を収録したマックス・ローチらの『強く求める！ マックス・ローチのフリーダム・ナウ組曲 We Insist! Max Roach's Freedom Now Suite』も、レストランでのシットインの様子をモチーフにしたジャケットとともに同レーベルからリリースされている。

ベトナム戦争に関する反対表明や徴兵拒否についても、1966年というかなりはやい段階でのことだったとはいえ、すでにこの頃には反戦運動が全国規模で眼に見えるかたちをとりはじめていたし、入信したネイションは一貫してメンバーがアメリカ軍による戦争に加担することを禁じていた。また、アリの背後でこの時期に徐々に盛り上がりを見せていく反戦運動や市民的不服従が、単純な比較はできないにせよ、1930年代の思想統制下にあった日本やドイツにおける市民的不服従や抵抗、あるいは1853年に発表されたハーマン・メルヴィルによる小説が示すパートルビーの「そうしないですむならありがたいのですがI would prefer not to」などと並置した際に、どれほどラディカルだったのかはよくわからない。さらに言えば、若くもハンサムでも機敏でもなく、体力もなければ雄弁でもない無名のサラリーマンの男が、疲弊した日常を送りながらも難民と行政のあいだに立ち、生じる齟齬や不和を無償でメディーエイトしつづけたこと、育児と家事とでめまぐるしく生活する主婦が3.11をきっかけにエネルギー政策の転換を求めて時間のないなか活動をはじめたこと——それらとの表層的ではない比較で、どれほど革新的だったのかもわからない。いや、正確に言うと、それらとの比較で、アリの言動だけを、あるいはアメリカの、一定の成果を見た市民運動だけを特別扱いすることに、どれほどの正当性があるのかわからない。

もちろんすぐに付け加えなければならないのは、アリによるこれらの宗教、人種、戦争にかかわる言動が、たやすかったなどというつもりはまったくない。制度的差別、あからさまな暴力、見えにくい侮蔑がつねに濃厚に働く社会・文化圏にあって、それに公然と抗うことは並大抵のことではないし、

著名な「みんなのアリ」として表象されてさまざまな役割を担わされることから逃げ、暴れまわることには熾烈な力を必要としただろう。安全圏からの外的な批評ほど安直で軽薄なものはないのだから、それは避けなければいけない。そこで本論では、現象としての「モハメド・アリ」を構成するいくつかのエレメントのうち、イスラームとストリート文化に注目し、解釈を展開してみたい。その意味で本論は、アリに関する歴史研究ではない。実在のアリ本人に関する新知見は本論にはない。そうではなくてこれは、アリの生きた時代とそこに働いた力学に関する、推論を含んだ人類学的探究である。

2. イスラームへの「改宗」とネイション・オブ・イスラームへの入信

モハメド・アリが象徴的な存在となり、なんらかの記号論的意味を読み込まれる「場」となっていくきっかけとなるのは、彼のキリスト教からイスラームへの「改宗」——とりわけネイション・オブ・イスラーム〔以下、アフリカン・アメリカンのあいだでの略称に従って、ネイションと記す〕への入信——であり、カシアス・クレイからモハメド・アリへの固有名の変更であった¹。

信仰の変更と名前の変更はそれぞれに別のことがらに属しているように見えるかもしれないが、いずれもアイデンティティの変化にかかわっている。もちろんこれはアリだけに特有の事象ではなく、1930年のネイションの生成時から現在に至るまで、ネイションの運動は（そしてアフリカン・アメリカンの多くの社会・文化運動は）、一貫してアイデンティティの創造と変更、したがって差異の創造と変更にかかわっていた。だからこそネイションは、聖書にかかわってクルアーンを導入し、キリストにかかわってムハンマドを引き合いに出し、教会にかかわってテンプル（モスク）に通い、牧師にかかわってミニスター（イマーム）を敬い、神を指す語に「アッラー」というアラビア語を用いてネイションの創始者であるマスター・ファラードと関連付けた²。そうして、入信した者にはフルネームやラストネーム——ネイションのもとでは奴隷名——にかかわって異なる名前や「X」を授与し、特定の振る

舞い方（身体の所作）を要求したのだ。

ネイションのメンバーになった者はみな、この新たな名前を獲得する。1934年以降70年代までネイションのリーダーだったイライジャ・プールは、イライジャ・カリームを経由してイライジャ・ムハンマドへと変わり、1950年代の出所以来64年にネイションを離脱するまで最も重要なスポーツマンだったマルコム・リトルは、デトロイト・レッド（ビッグ・レッド）を経由してマルコム・X（呼び名としてはブラザー・マルコム）へと変化し、ネイション離脱後にはエル＝ハッジ・マリク・エル＝シャバズとなる。そして、マルコム暗殺の容疑で逮捕され、冤罪のまま23年間にわたって刑務所に拘束されたトマス・ジョンソンは、ネイションのメンバーだった時代のトマス・15X・ジョンソンを経たのちに、ネイションを離れてカ ril・イスラームとなった。

名前が変わるだけですべてがすぐさま単線的に変化するわけではない。名称は個人の力だけで変化するわけではなく、教団のリーダーから与えられ、メンバー間での「挨拶」や「呼びかけ」などの儀礼的行為を通じて集合的に使用されることで認知されていく。だから名前の変更には、個人だけでなく共同体全体の変化しようとする意志、変化に向けた兆し、変化への傾向性が顕著にあらわれているとは言える。また、著名なリーダーたちを除くと、通常のメンバーたちの日常ではこれまでの名前が継続的に用いられており、そのことを考えると新たな名前呼び合うことがメンバー同士の秘儀的な結束を強めただろうことは想像に難くないし、それによって「白人世界」だけでなく「黒人世界」（たとえば黒人キリスト教の世界）とのあいだに差異化が進んでいったこともよくわかる。

変化するのは、しかし、名前だけではない。先に述べたように、服装や容姿、挨拶や呼びかけなどの振る舞い、人やモノへの触れ方を含めた所作であった。

まず服装規定について見てみたい。よく知られているようにネイションの服装規定では清潔であることを基本として、男性の場合はスーツやネクタイ、あるいはユニフォームの着用が課せられていた。髭は剃り、毛髪も短く刈っておく必要があった。ネイションのメンバーに多くのストリート出身

者が含まれていたことを考えると、こうした服装の変化がメンバー間でのアイデンティティ形成・変容に与えた影響はきわめて大きい。制服や軍服を着用することで人が当該組織内での新たな役割を担い始めるのと同様に、ネイション内のムスリムたちもこうした新たな服装規定のなかで新たな役割を担い始める。

また服装は、黒人間での差異化をはかるときの視覚的な徴^{しるし}としても機能してきた。たとえば、1950年代、60年代の貴重なスケッチにもなっている『ハーレムに生まれて』の著者、クロード・ブラウンの記述を見てみよう。

俺が最初にブラック・モスレムのことを聞いたのは、一九五五年だった。その頃からモスレムの連中が、一二五丁目と七番街の角で説教をはじめた。そこは、いわばハーレムの演説広場で、政治の好きな連中が集まって来ていつも議論していた。ハーレムで演説したいと思うやつは、誰でも、一二五丁目と七番街の角へ行って、やることになっていた [ブラウン 1971: 181]。

マルコムが出所し、ハーレムのテンプルにミニスターとして派遣されてくるのは1954年のことなので、それを考えるとこの記述は時代状況にぴたりと一致する。そしてブラウンによれば、ハーレムの住人たちはスーツを着てストリートに立っていた「ブラック・モスレムたち」のことを、その他の黒人組織と比較して、とても身近に感じていたという。

いくつかのことがここから解釈できる。第一に、1955年頃、ハーレムの路上にはいくつもの政治的主張、社会的メッセージ、宗教的理解がひしめきあっていたということ。これについては、スパイク・リーによる映画『マルコム X』(1992年)にもそれを彷彿とさせる場面が描かれているし、まさに同じ近隣地区にあったルイス・ミショーの本屋を扱った『ハーレムの闘う本屋——ルイス・ミショーの生涯』でもその様子が見てとれる [Lee 1992; Nelson 2012]。

第二に、2017年現在ではステイト・オフィス・ビルディングがそびえたつ125丁目と7番街のストリート・コーナーでいくつもの主張が飛び交うなかであって、特定のメッセージがしかるべき差異化をはかり、勝ち残り、人々のあいだに浸透するためにはそれなりの戦略が必要だったであろうこ

と。その戦略のなかで、ネイションの特徴的な服装や身なりが果たした役割は大きかったということだ。この服装や身なりは、アメリカのミドル・クラスの文化コードと奇妙な一致をみる。それはワーキング・クラスというよりは、ホワイト・カラーのよりよき生産主体となるべく規律＝訓練された一連の身体的特性と結びつくのだ。

ネイションの求める身体的な振る舞いや所作はどうだろうか。服装や身なりと違ってこの位相では、ミドル・クラスのマナーとストリート文化の不文律とが微妙に入り混じる。一方で、姿勢の正しさや勤勉さ、罵り言葉を避けた正しい言葉遣いなど、ミドル・クラスの所作が求められる。他方で、ネイションの歴代のリーダーたちの語りは戦闘的かつ闘争的で、ダズンズ (dozens) やサウンディング (sounding) などのストリート文化の伝統に関係する。先に挙げたブラウンの記述のなかでも、ムスリムたちの言葉遣いは、ハーレムの黒人たちにとってアクセスしやすいものだったとされている。この点のはのちに戻ってくることにしたい。

いまひとつのネイションの特徴は、徹底した食事と健康に関する管理をおこなっていたことにある。この傾向は、1930年代初頭にマスター・ファラードがデトロイトの黒人街でものを売り歩きながら教を説いてまわっていたときからのものだったようだ [Beynon 1938]。のちにイライジャの手を通じてそれらの教えが定式化され公刊される。禁酒・禁煙はもちろん、野菜を多く摂ること、スナック類や甘いものを避けることなど、具体的な食事内容の指導が『生きるための食べ方 *How to Eat to Live*』には描かれている。たとえば、イライジャは書いている。

一日に一食あるいは二日に一食だけ食事をしなさい。そうすれば寿命を延ばすことができる。

(中略)

砂糖やでんぷん質の食べ物を断つことで、糖尿病は確実にコントロールし撃退することができる。一日一食、もしくは二日一食の正しい食べ方をすれば（早く始めている場合）、血中の糖分が下がるでしょう。糖尿病にかかっている場合、ジャガイモやサツマイモは食べるべきでない。そして糖尿病患者でなかったとしても、（ジャガイモのような）でんぷん質の食べ物を多く摂るべきでない。サツマイモは

もちろん摂るべきでない。こうした種類の食べ物の摂取には気をつけるべきである。[Muhammad 1967: 22-23]

一日一食主義や糖質制限などは、現在流行の健康志向とも重なるところがあり興味深い。だがそれ以上に、ヴィーガニズムやヴェジタリアニズム、エコロジー思想などの、食事を通じた自己の意識改革や身体の変革運動に連なる点が特筆に値する。ボクシングをはじめとしたスポーツの世界で活躍する者たちは、肉体の訓練と食事の改善に取り組む。それと同様に、ネイションのメンバーは食事制限に力を入れるのだ。人々は、アリに「規律＝訓練され、闘うことのできる屈強で黒い身体」を読み取るのと同様に、ネイションのメンバーやフルーツ・オブ・イスラームのメンバーにも同様の身体を見るのだ。

3. ストリート文化から見る「モハメド・アリ」

ネイション・オブ・イスラームは、食事の改善を含む身体の管理、信仰や名前の変更に伴うアイデンティティと差異の再構築、服装や身なり、身振り、所作に関する文化コードの変更だけにかかわったわけではない。メッセージとしてはむしろ、「白人アメリカ」からの分離独立が前面にあり、キリスト教の否定とイスラームへの帰依が強くあった。そして、この二つの強力な主張があったがゆえに、ネイションはヒステリックな反発を招いたし、カルト的なイメージが長くつきまとった。要するに、モハメド・アリへの嫌悪感の多くは、このネイションとの結びつきがゆえに生まれたと言っても過言ではない。

当時はまだアメリカにあまりひろく知られていなかったイスラームは、ネイションを通じて流布していくことになるのだが、彼らがアメリカからの分離独立をうたったメッセージのひとつを見てみよう。たとえば、ネイションのプログラム「ムスリムの望むもの」から。

4. 我々は、両親や祖父母が奴隷の子孫だったアメリカの仲間 [黒人] たちが、この大陸があるいは別の場所に、自分たちの独立した国家もしくは領土の確立を許されることを望む。我々は、かつての奴隷主がそうした土地を提供する義務を負っており、またその土地は肥沃で鉱物資源の豊かな場所であればならないと考えてい

る。我々は、かつての奴隷主がそのような独立した領土で、我々が自分たちで必要なものを生産し、供給できるようになるまでの20年から25年間は、我々を養い、必要なものを提供する義務があると考ええる。

我々は400年間にわたり汗と血を捧げ、その見返りとして人類がこれまでに経験したことのない最悪の扱いを受けた。我々が彼らと平和かつ平等ななかで暮らしていくことはできない。我々のこの土地への貢献と白人アメリカによってもたらされた苦しみを考えれば、我々が完全に独立した国家ないし領土を要求することは正当だと考える³。

ネイションの要求は一目瞭然で解説を加えるまでもないかもしれない。しかし、まず言葉のトーンに注目してみたい。「正当だと考える」要求を提出しながら、ここでの言葉は「最悪の扱いを受けた」「平和かつ平等ななかで暮らしていくことはできない」など、告発のトーンが濃厚にあらわれている。もちろん、「白人アメリカ」に対するこの種の告発のトーン自体が珍しいわけではない。ネイションの特徴は、この告発をつねに強い調子で挑発をとめないながら継続しつつ、アメリカから独立した国家と領土を要求したところにある。

「公民権 *civil rights*」を志向したキング牧師らの公民権運動との差異は、単に統合か分離かという点にあるだけでなく、この徹底的な告発のトーンにもあらわれているかもしれない。そして、この観念と方向性に強く影響を受けたマルコム思想は、のちにネイションを離脱後も「人権 *human rights*」の要求というところに行きつく⁴。それは、タラル・アサドがすでに指摘するように全世界の人々を対象としており、ユダヤ＝キリスト教的言語で語られ国内市民の救済を前提にした「公民権」よりもはるかに普遍的なメッセージだった。しかし、それがゆえに国家のもとでの法の力の作用を受けることがなく、成果を得ることがなかった [Asad 2003: 140-148]。

いまひとつのネイションのメッセージは、キリスト教の捉え直しとイスラームへの帰依である。通常は「改宗」として記述される信仰の変化は、「個人的な体験」として耳を傾けた場合、神秘的なこととして語られたり、肉体的・精神的危機を打破する実際的なこととして語られたりする [Beynon 1938; James 1982; 中村 2015]。また、このような体験が少なくとも現在にお

いては、「改宗」とは語られず、「もともとそうあった状態への回帰」として語られる場合もある〔中村 2013〕。

歴史学者の黒崎真もすでに指摘しているように、ここでのイスラームはなによりもアメリカ合衆国の黒人史のなかのイスラームであり、その特殊性はユダヤ＝キリスト教文化圏の力学との関係でよりよく捉えることができる。黒崎にとってそれはキリスト教の捉え方——抑圧か解放か——をめぐる「葛藤の歴史」であるという〔黒崎 2015〕。たとえばそれは、イライジャによる次のような言葉のなかにも明白にあらわれる。

キリスト教は、黒人を奴隷化する目的で、悪魔たちによって組織され支えられている宗教である。(中略) 神(アッラー)は、キリスト教とは白人によって組織されたもので、彼ら白人は黒人を欺きそれを認めさせるために、創始者・創造者としてキリストの名前をそこに刻んだのだと言った。我々のとるべき最初のステップは、白人にその宗教を返すことである。キリスト教、教会、そして白人の名前。この三つは、我々を彼らに拘束された状態のままにしつづける奴隷制の鎖である。これら三つを手放したとき、はじめて我々は自由になることができる〔Muhammad 1957: 13-14、段落をひとつにまとめ、引用符を取り去った〕。

「キリスト教」、「教会」、そして「白人の名前」——この三つを手放したときにはじめて自由になれるという記述は特筆に値する。これを見るかぎり、ネイションがこの三項を当面の敵と考えていたのは明白なことのように見える。そしてそれ以上に、「神(アッラー)」を引き合いに出し、それに委託するかたちで「キリスト教とは白人に組織されたもので」「創始者・創造者としてキリストの名前をそこに刻んだ」と主張する箇所が興味深い。イライジャにとっての問題は、キリスト教が神の名のもと、いま現にそうあるかたちですでに創始・創造されてしまっていることにあった。イライジャたちにとってこの起源^{オリジン}をめぐる問題は、すでに自分たちのあずかり知らぬ内容と方法ではじめられ、いま現にこのような状態に引き継がれてきたことがらをどのようにずらし、反転させ、破壊し、内破させ、迎え撃つかにあった。

しかし、別の箇所ではイライジャは次のようにも書いている。

私はいくらかの善を含まないような神聖な書物や宗教を知らない。[ただし、] 今日アッラーが求めるのは、混じったものでもなく、すべてが善であるような書物あるいは宗教である。真実と虚偽の混合物でも、アッラーの敵によって変更を加えられてきたものでもない [Muhammad 1957: 12、強調は原著にあったもの]。

キリスト教や聖書はじつは全否定されるわけではない。闘うべき敵ではある。しかし、そこには「敵」の全否定や根絶を巧妙に避ける術が見え隠れしている。戦闘的なストリート文化の物言いに眼を奪われると、こうした根絶回避の技術は見えにくくなるかもしれない。あるいは、こう言ってみたい。根絶に向かう衝動、それを維持する無思想性、報復の反復を回避するために、敵対的な言動が必要なのだ、と。そして、そのような「暴力に抗する暴力」は、演出され、展示される必要がある、と。

マルコム・Xは、ネイションのもと、ほとんど叫ぶような声で、公衆にむかって次のように語りかけている。

ムハンマド師が憎悪を説いてまわっていると彼らは言う。ムハンマド師が薬物とかアルコールを嫌悪するように説くからだ。ムハンマド師のことを黒人至上主義者だと彼らは呼ぶ。あなたがたや私が、白人と同じようにすばらしいというだけでなく、白人よりも優れていると教えてくれるからだ。そう、白人より優れているのだ。あなたがたは白人より優れているのだ。ただそれだけのことで、たいしたこと言っているわけじゃない。あなたがたが白人と張り合えるなんてことはわかりきったことでしょう。白人はいったい誰と張り合えるというのだ。白人の肌を見てみなさい。あなたの肌とは比べものにならない。白人の肌と比べたら、あなたがたの肌は黄金のように光り輝いているのだから (Orlando Bagwell, *Malcolm X: Make it Plain*, 1994 より)。

文字に書き起こしてしまうと語りの音楽性が失われてしまうが、マルコムがこのスピーチをおこなうとき、彼は断固たる様子で堂々とネイションのメンバーと潜在的に信徒になり得る黒人とに向けて語りかけると同時に、見物人やメディア関係者の白人たちにも自らの思想を示してみせている。

このような語り表現されているのは、先に述べたダズンズやサウンディングなどの名称で知られる、現在のヒップホップやストリート文化にも連

なるアフリカン・アメリカンのあいだの声を駆使しておこなわれる「闘争 **battling**」や「戦闘 **combating**」の文化的伝統である。刑務所詩と呼ばれる即興詩、アフター・アワーズのジャズ・クラブのジャム・セッション、教会やネイションのテンプル／モスクでの宗教指導者のアジテーションやコール & リスpons、集会場や床屋での議論、路上の言葉での果し合い——いずれの場面においてもこの「闘争の文化」が生きていることがわかる。これを念頭にアリの身体的で躍動感のある語りに注目してみよう。

みんなに証言者になってほしいね、いちばん偉大なのはオレなんだってことを！
 オレが生きものなのなかじゃいちばん偉大なんだ。オレは顔にひとつの傷もねえけど、ソニー・リステンをやっつけちゃった。22歳になったばかりだぜ。オレがいちばん偉大にちがいない。世界に示してやったんだ。オレは神と毎日話す。本物の神がどんなだか知ってるよ。(中略) 世界を揺らしてやったぜ。オレが世界のキングだ。オレはイケてるし、タフだ。世界を揺らしてやったぜ！ 世界を揺らした！ そう、揺らしたんだ！ おまえら、オレの言うことを聞きなよ。オレがいちばん偉大なんだ。オレは負けるわけがねえ [Hauser 1991: 78、ただし、実際の録音と照らし合わせて、若干の修正をおこなった]。

すでに有名で幾度も引用されているこの言葉は、1964年のソニー・リステン戦の直後、そしてネイションへの入信を公表する直前のものである。ストリート文化に独特の「挑発」と「闘争」の徴が見てとれる。対象化し、三人称の問題として描写・分析されてしまうと、このようなストリート的な表現の凄味は消えてしまうかもしれない。しかしストリート文化の闘争的要素がなし遂げているのは、眼のまえの相手への侮辱を聴衆のもとで表現・披露することで既存の文化コードを絶妙なやり方で侵犯し、制度化したものからズレた語法や文法をつくりだすことである。これは、いわゆる「ストリートのコード」の生成変化の瞬間なのだ⁵。

それは、既存の文化コードを内面化した身体にとって脅威や暴力として認識されるかもしれない。異形の身体が東京の中央線内に大型のラジオを持ち込んでパブリック・エナミーのラップ「Fight the Power」を大音量で流すところを想像するなら、きっとそれは「マナー違反」と認識されるだろう。

だが、ストリート文化と身体性の問題を捉えスケッチしたスパイク・リー監督の代表作『ドゥ・ザ・ライト・シング』では、登場人物のラジオ・ラヒームがつねに持ち歩くラジオから流す大音量の音楽は単なるマナー違反というだけでなく、自らの存在様式の表現と考えられている [Lee 1989]。したがってラジオの否定はラジオ・ラヒームの体現する文化の否定であり、存在様式や生存のあり方の否定へとつながる。そして映画の終盤でのラジオの破壊は、ラヒームの死へと直結する。

ストリート文化を内面化しつつアカデミアにも身を置き、数々の魅力的なエスノグラフィを著しているテリー・ウィリアムズは、そのような過剰なほど闘争的な言語（音声）表現は神話上のトリックスターのような存在を前提につくられているという。そして彼は、本論のエピグラフに紹介した、民俗学者ブルース・ジャクソンが記録した神話上の人物、ドロマイトについてのトースト——多くの場合、刑務所でうたわれる口承詩——を紹介しながら、次のように述べる。

ドロマイトは神話的なワルなのだが、それ以上に、彼は「バッド・ニガー」である。彼は、鉄道王たちの事業に全力を尽くしたとされ、黒人の模範とされるジョン・ヘンリーとは対極にある存在である。「ドロマイトはクソ厄介なことをもたらす」と言われている。「他の奴らはそれを受け入れるしかないんだ」と。

……（中略）……

刑務所や移民収容施設やストリート・コーナーの文学表現を見てみると、なにも持たぬ人々が言葉に力を見出していることがわかる。果てしない日々が過ぎて行くなかで自分の監房や他の監房に向かって語る者がいるのだ。そしてそのような語りにおいては、ドロマイトやスタッガー・リーのようなワルで屈強な男たちは腕とペニスですべての障害を乗り越えたとされる。しかし、この口承の即興詩の最後には、ワルのタフガイたちは孤独であり、想いも果たされていないことが明らかになる [ウィリアムズ&コーンブルム 2010: 117-118、訳を一部修正した]。

屈強なワル、口の達者な表現者、腕とペニスだけで生き延びるタフガイ、けれども、最後には想いも果たしきれず孤独のうちに死んでいく。そっくりそのままではないが、驚くほど、ある意味では陳腐に思えるほど、アリのイメージと重なる。人々がアリとともに時代の諸力との関係のうちでつくりあ

げ、変化させていったイメージと重なるのだ。そのイメージに（わかりやす過ぎるほどの）マスキュリンな「男性中心主義」や「ファロセントリズム」、「ヘテロセクシズム」などを読み取るのは容易である。しかし、そのことをもって黒人文化やストリート文化がマスキュリンだと結論付けることからはなにも生まれなければかりかミスリーディングですらある。そうではなく、現代アメリカ社会の力学が身体へのマスキュリンでセクシストな方向づけをおこなうのだ。欲望をつくりだし機会を演出しながら去勢すること、潜在する力を密やかに認めつつも否定と攻撃を継続することで芽をつむこと——こうしたことは支配の戦術に他ならない。それを認めるとき、言葉と身体しか頼るものがない者がとる戦略はどのようなかたちをとるのか。そのとき、ストリートから、リングから、闘争の場から生まれた、泣き叫ぶような表現とはなんだろうか。

鮫。

鮫。

鮫。

奴らを咀はう。奴らを破壊しよう。

さもなければ、奴らが俺たちを皆喰ふつもりだ。

——金子光晴「鮫」

絶叫や嘔吐から吃音や呻きや喘ぎにいたるまでの叫びを、発狂や錯乱や自殺や絶望や断念の一步手前で発せられる声と捉えるなら、その背後にはいくつもの苦痛や悲痛があるように思う。本論で扱ひ念頭に置いてきた闘争的言動のすべては、より大きな暴力に抗するかたちで生起する。生まれるまえから耳もとでつねにささやかれつづける否定のメッセージのうちにあって、自らの生を、自らの身体や声を肯定しようとするなら、相手の文法を身につけてしまいながらも「最初の」否定を否定し、反動のリズムで自らのシンタクスを打ち立てないといけない。歴史や自然や価値意識や信仰や倫理に関する「事のはじまり（始原）」を、その「つねにすでに always already」を制定し継続する《暴力 Gewalt》、法やルールやコードや習慣の《暴力》——それらの問題視されにくい力に抗して。

「モハメド・アリ」は、暴力的に表象されるその声と身体は、一度たりとも《暴力》をふるっていない。叩きのめされてきた人々が声をあげ、うめき、断末魔の叫びをあげるとき、《暴力》は静かなままだ。そこに、匂いは、ない。あるのは、あとに残された痛苦の、しびれた匂いだけである。

4. おわりに

モハメド・アリの言動が複数の人々の神経を逆なでしたわけだが、そのような反応を引き起こす契機として本論では、イスラームへの帰依——とりわけネイションへの帰属——そして彼の体現したストリートの言葉と所作とをとりあげてきた。1950、60年代を通じた黒人たちのイスラーム運動やストリート文化との関連でアリのイメージの生成変化をみると、当時受容されたイスラームが美意識を含む価値意識の根本的変更を迫る運動だったことがわかる。だからこそ、賛否ともに強い反応があらわれたのだ。ちょうどそれはジャーヒリーヤ時代に、一神教の世界観、民族部族間の融和、偶像崇拜の禁止、男女平等、奴隷の禁止など、鋭く異なる価値意識をとらえ、抑圧のなかでひろめられたイスラーム生誕の時代に重なる。

だが1964年のマルコム・Xの離脱と65年の殺害のあと、ネイションは少しずつ弱体化する。そして1975年のイライジャの死後、ネイションはワリス・ディーン・モハメドのもとで大改革をやったのける。それまでのネイションに特有の教義をことごとく変化させ、おびただしいほどの名称変更をやったのける。服装規定や食事制限はなくなり、通常の服で礼拝にやってきて、スンナ派のムスリムと同様にラマダーンを過ごす。独立国家の樹立は目指さず、アメリカの行政機関や軍隊に入ることも奨励する。マスター・ファラードの神格化をやめ、白人を悪魔とする規定も否定する。組織名はネイション・オブ・イスラームからワールド・コミュニティ・オブ・アル=イスラーム・イン・ザ・ウェスト (1976～)、アメリカン・ムスリム・ミッション (1981～)、アメリカン・ソサエティ・オブ・ムスリム (1985～)、モスク・ケア (2003～) へと変化を遂げる。テンプルはモスク (マズジッド) に、ミニスターはイマームに名称変更され、特徴的なラストネーム「X」も廃止される⁶。

1977年にはルイス・ファラカーンが改革に異を唱えた者たちとともにあらためてネイションを再結成するが、アリはネイションを離脱し、ワリスにしたがってシンナ派イスラームに傾倒する。70年代後半以降のアリのイメージの変化と同時に、イスラームの表象の変化を見る作業は本論ではできなかった。これは別稿での課題としたい。そこには、80年代、90年代を通じての国際情勢やアメリカの外交政策、ムスリム移民の増加など、さまざまな力学が関係してくるだろう。

謝辞:本論は、2016年11月26日、立教大学での研究会「モハメド・アリとは誰か——「アメリカン・レジェンド」の虚実」での発表とその前後での藤永康政氏と坂下史子氏との議論を経て書いたものである。両氏に深く感謝すると同時に、研究会当日の参加者からの問いかけにも謝意を表したい。とりわけ参加者のひとりであった丸山雄生氏から投げかけられた「身体性と言葉」というキーワードに呼応するかたちで内容を練り直した。もちろん全員からのコメントや投げかけに応答できたわけではなく、誤りがあるとすれば責任は私にある。

註

1. Muhammad Aliの表記に合わせるなら「ムハンマド・アリ」とすべきかもしれないが、慣例にしたがってモハメドとする。
2. アリの入信した1960年代当時のネイションのもとでは、モスクはテンプル、イマームはミニスターと呼ばれていた。また、現在では否定されているが、イライジャ・ムハンマドはたびたび、創始者のマスター・ファラードを神が人格化した存在と位置付けている。なお、アッラーは単にアラビア語で「神」を意味するだけだが、50、60年代のアメリカ社会でアラビア語を用いて神を指し示すと、2017年の現在とは異なる響きを持ったであろうことは想像に難くない。
3. 「ムスリムの望むもの」<http://www.noi.org/muslim-program> (最終アクセス2017年2月13日)。強調は私による。
4. たとえば、[Malcolm X 1990]。
5. 「ストリートのコード code of the street」という言い方は、アメリカの優れた都市エスノグラフィをのこしているイライジャ・アンダーソンの言葉から取った [Anderson 1999]。
6. こうした変化については、拙著の第1章で詳しくとりあげた [中村 2015]。

引用文献

- Anderson, Elijah. *Code of the Street: Decency, Violence, and the Moral Life of the Inner City*. 1st edition. New York, N.Y.: W.W. Norton, 1999.
- Asad, Talal. *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity*. Stanford: Stanford University Press, 2003. 『世俗の形成——キリスト教、イスラム、近代』中村圭志訳、みすず書房、2006年。
- ベイトソン、グレゴリー『精神の生態学』（改訂第2版）佐藤良明訳、新思索社、2000年。（原著 *Steps to an Ecology of Mind*. Chicago: The University of Chicago Press, 2000[1972].）
- Beynon, Erdmann D. "The Voodoo Cult among Negro Migrants in Detroit." *The American Journal of Sociology* 43(6) (May 1938): pp. 894-907.
- ブラウン、クロード『ハーレムに生まれて』小松達也訳、サイマル出版会、1971年。（原著 *Manchild in the Promised Land*. New York: Macmillan, 1965.）
- Hauser, Thomas. *Muhammad Ali: His Life and Times*. New York: Simon & Schuster Paperbacks, 1991.
- Jackson, Bruce. *Get Your Ass in the Water and Swim Like Me: African American Narrative Poetry from Oral Tradition*. New York: Routledge, 2004[1974].
- James, William. *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature*. New York: Penguin Classics, 1982[1902]: 『宗教的経験の諸相 上・下』榊田啓三郎訳、岩波書店（岩波文庫）、1969・1970年。
- 黒崎真『アメリカ黒人とキリスト教——葛藤の歴史とスピリチュアリティの諸相』神田外語大学出版局（ぺりかん社）、2015年。
- レヴィ＝ストロース、クロード『呪術師とその呪術』田島節夫訳『構造人類学』、みすず書房、1972年、183・204頁。
- Malcolm X. "The Ballot or the Bullet." *Malcolm X Speaks: Selected Speeches and Statements*. George Breitman Ed. New York: Grove Press, 1990[1964], pp. 23-44.
- マークシー、マイク『モハメド・アリとその時代——グローバル・ヒーローの肖像』藤永康政訳、未来社、2001年。
- Muhammad, Elijah. *The Supreme Wisdom: Solution to the so-called Negroes's Problem*. Virginia: The National Newport News and Commentator, 1957.
- . *How to Eat to Live*. Chicago: Muhammad Mosque of Islam No. 2, 1967.
- 中村寛『アーカイヴへの不満——アフリカ系アメリカ人ムスリムにおけるアイデンティティをめぐる闘争』『文化人類学』78(2)、2013年、225-244頁。
- . 『残響のハーレム——ストリートに生きるムスリムたちの声』共和国、2015年。
- Nelson, Vaunda Micheaux (Artwork by R. Gregory Christie). *No Crystal Stair: A Documentary Novel of the Life and Work of Lewis Michaux, Harlem Bookseller*. Minneapolis: Carolrhoda Books, 2012: 『ハーレムの闘う本屋——ルイス・ミシヨアの生涯』原田勝訳、あすなろ書房、2015年。
- Siegel, James. *Naming the Witch*. Stanford: Stanford University Press, 2006.
- ウィリアムズ、テリー&ウィリアム・コーンブルム『アップタウン・キッズ——ニューヨーク・ハー

レムの公営団地とストリート文化』中村寛訳、大月書店、2010年。（原著 *The Uptown Kids: Struggle and Hope in the Projects*. New York: A Grosset/Putnam Book, 1994.）

参考映像

Bagwell, Orlando. *Malcolm X: Make it Plain*. 1994.
Lee, Spike. *Do the Right Thing*. 1989.
Lee, Spike. *Malcolm X*. 1992.
Wallace, Mike and Louis Lomax. *The Hate That Hate Produced*. 1959.

参考 URL

ネーション・オブ・イスラームのウェブサイト：「ムスリムの望むもの」
<<http://www.noi.org/muslim-program>>（最終アクセス 2017年2月13日）